

聖書：コリント人への手紙第一 3：18～23

説教題：キリストのもの、神のもの

日時：2022年3月6日（朝拝）

パウロは1章18節以降、この世の知恵と神の知恵を対比的に述べて来ました。そうしたのはコリント人たちがこの世の知恵に引き付けられ、この世の知恵によって信仰生活・教会生活を送ろうとしていたからでした。これはコリントの町がギリシャの大都市であったこととも関係していました。当時のギリシャ世界では知識や知恵、雄弁術が高く評価されました。哲学的表現をもっていかに格調高く、人に印象を与える話し方ができるかが競われ、それができる人が評価されました。そのようなこの世の価値観に立ってコリント人たちは教会のリーダーたちを評価し、私はパウロにつく、私はアポロに、私はケファに、私はキリストに、などと言って争い、分派活動をしていました。またこの四者にとどまらず、この時コリント教会で働いていた働き手たちを巡っても同様の論争を行っていたようです。彼らはある特定のリーダーを持ち上げ、他のリーダーをこき下ろし、自分が支持するリーダーが高く上げられることによって自分自身も高く上げられることを目指して論争に熱心になっていました。彼らはそうして自分たちの知恵を誇りながら実際にしていたことは、前回最後の17節にあったように、神の宮である教会を壊すことでした。そんなこれまでの議論のまとめとなるのが今日の箇所です。

パウロは18節で「だれも自分を欺いてはいけません。あなたがたの中に、自分はこの世で知恵のある者だと思ふ者がいたら、知恵のある者となるために愚かになりなさい。」と言います。彼はここで自分を知恵ある者だと思ふ人は自分を欺いていると言います。本当は知恵ある者ではないのに知恵ある者だと思い込んでいるだけ。それは幻想に過ぎないと言います。なぜそうかと言えば、これまでも見て来た通り、この世の知恵は神の知恵と一致せず、むしろ神の知恵と対立するものだからです。特にそれはキリストの十字架を巡ってはつきり現れることが述べられて来ました。この世の知恵は十字架を蔑み、これを愚かだと断じ、このような話とは関わらないでおこうと考えます。ところが神の知恵は十字架につけられたキリストにおいてこそ示されています。そこに神の救いは用意されています。ですからこの世の知恵は神の知恵から遠く離れていると言わざるを得ません。言い換えれば、19節にある通り、「この世の知恵は神の御前では愚か」ということです。もちろんこの世の知恵のすべてが無意味であると

か、それらがすべて悪であるという意味ではありません。人間は神のかたちに造られ、人間が人間である限り、そこに神を映し出す光は残っていると聖書は語ります。いや力強く光を放っていると言います。私たちはそのことをもちろん積極的に認めて良いのです。ピリピ人への手紙 4 章 8 節：「兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。」しかし神の救いは十字架につけられたキリストにおいてこそ与えられていますから、これを否定し、蔑むようでは、その知恵は愚かと言わざるを得ません。この世の知恵は結局救いをもたらしません。そこでパウロは言います。「知恵のある者となるために愚かになりなさい」と。神の知恵に立つとは、この世から愚かと見られることも受け入れるということということです。人間の知恵には限界があることを認め、神の知恵が自分に入ってくるためにその場所を開けることです。

パウロは 19 節で「なぜなら、この世の知恵は神の御前では愚かだからです」と述べて、これが自分一人の主張でないことを示すため、旧約聖書から 2 つの御言葉を引用します。まず 19 節に記されているのはヨブ記 5 章 13 節からの引用です。これはテマン人エリファズというヨブの友人の言葉の一節です。ヨブの友人たちの言葉は必ずしも正しいものではなかったことがヨブ記を読むと分かりますが、ここで引用されている言葉は真理であるということですから。5 章 12～14 節：「神は悪賢い者たちの企みを打ち砕かれ、彼らの手は良い成果を得られない。神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえ、彼らのねじれたはかりごとは突然終わる。彼らは昼間に闇と出会い、真昼でも、夜のように手探りする。」ここに人間がいくら知恵を絞って何かを企んでも神に太刀打ちできないこと、神はむしろそれをひっくり返し、彼らの悪知恵を逆に用いて彼らを捕らえること。いわば彼らは自分が掘った穴に落ち込むことが言われています。いかにこの世の知恵は神の知恵に遠く及ばないか、神の前にそれは小さく愚かなものでしかないかが言われています。

もう一つ、20 節で引用されているみことばは詩篇 94 篇 11 節です。94 篇 8～12 節：「気づけ。民のうちのまぬけな者どもよ。愚かな者どもよ。いつになったら悟るのか。耳を植えつけた方が聞かないだろうか。目を造った方が見ないだろうか。国々を戒める方が責めないだろうか。人に知識を教えるその方が。主は人の思い計ることがいかに空しいかを知っておられる。なんと幸いなことでしょう。主よあなたに戒められあ

あなたのみおしえを教えられる人は。」人間は自らを賢いと考えて高ぶり、神を侮り、自分の知恵による行動は成功すると思っています。しかし主は人の思い計ることを全部知っておられ、それらがいかに空しいかを知っておられると言われます。むしろ幸いなのは主に戒められ、主のみ教えを教えられる人だと告白されます。

こうしてパウロは 21 節で「ですから、だれも人間を誇ってはいけません」と言います。ここで考えられているのは、コリント人たちがあるリーダーを誇り、その特定の教師とのつながりによって自分たちを誇ろうとしていたことでしょう。そのように人間を誇って互いに争い合うことは空しいことです。パウロはここで神の視点でどう考えるべきかを示します。21 節後半で彼は「すべては、あなたがたのものです」と言います。これは一見不思議な展開ではないでしょうか。人間を誇ってはいけないと言われたのですから、次に来るのは人間でなく神を誇れ！という言葉ではないかと推測するところです。しかしそうありません。どうして特定のリーダーを誇るべきでないかと言うと、それは「すべてはあなたがたのものだから」と言われます。つまり「誰かをえり好みして誇るのは間違いである。全部があなたがたのものなのだから。」とされているわけです。

まず「パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ」と言われます。1 章 12 節にすでに名前が出て来た三人です。コリント人たちはこれらの教師の誰につくかを巡って互いに争っていました。しかしパウロは、みんなあなたがたのものだ！と言います。彼らは一人を高く上げて、その教師に私はつくと言っていました。その考え方は神の前に正しくありません。正しい考えとは、コリント人たちが教師につくのではなく、これらの教師たちの方がコリント人たちに仕えるというものです。すでに 3 章 5 節でそのことは言われていました。「アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって・・・」。次回 4 章 1 節でも同じことが言われます。パウロとアポロとケファにはそれぞれ違いがあります。強いて言えばパウロは開拓伝道者、異邦人宣教の使徒。アポロは聖書に通じていて、雄弁で、力強く相手を論破できる器。ケファすなわちペテロは生前のキリストを良く知っている人で、あの 12 使徒の中の一番弟子です。コリント人たちはこのような違いに目をつけて、誰が一番優れているか、私は誰につくかと言って争い、自分が支持しないリーダーを攻撃していましたが、それは全く御心に反すること。これら三教師はみな、神が教会の益のために備えた器です。もしアポロを選んでパウロやケファを切り

捨てたら、パウロやケファが与えてくれたであろう益を教会は受けられないことになってしまいます。それは愚かです。神の意図はそれぞれ違った賜物を持つ教師たちが総合的に用いられて教会が益を受けることです。

次に「また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ」と言われます。話がよいよ大きくなります。これらはいずれも私たちの力ではどうにもならないものであり、私たちはこれらの前で自らの小ささ、無力さを思わずにられません。ところがこれらは全部あなたがたのもの！と言われます。どういうことでしょうか。まず世界が私たちのものとはどういうことでしょうか。とんでもない主張のように聞こえます。しかし今この世界を治めているのはキリストです。キリストは世界の上に持っている支配権、所有権を教会の益のために発揮されます。ということは、この世界すべては私たちのものということになります。また「いのち」と「死」についてはどうでしょうか。私たちはいつまでこのいのちが続くか、いつ自分に死が訪れるか、自分としてはなす術がなく、ある意味で恐れながら毎日生きています。しかし思い起こさせられるのはピリピ書1章21節：「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」何と生であろうと死であろうと、主にある私たちにとってはどちらも良いことです。どちらも益です。ですから生も死も、今や私たちの祝福に仕えるものです。そして「また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの」とあります。今日明日どうなるか、また遠い将来どうなるか私たちには分かりません。しかし私たちは不確実さの中で翻弄されて生きるしかない者たちではありません。思い起こされるのはローマ人への手紙8章28節：「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」ですからすべてはクリスチャンのためのものです。あまりに大胆な言い方に聞こえますが、クリスチャンは今やすべてのものの主人であり、すべては私たちに仕えるものとして与えられているのです。

そして最後の23節に「あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです。」と結ばれます。ここになぜ、すべてはあなたがたのものであるという真理が成り立つのか、その理由また根拠が示されています。それはあなたがたがキリストのものだからということです。22節で見た祝福はすべて彼らが（そして私たちが）キリストと結ばれ、キリストのものとしてされているからこそ、彼らの上に（また私たちの上に）実現

している祝福です。それはキリストの十字架を通して勝ち取られた祝福です。キリストは十字架上で私たちが支払うべき罪の代価を全部支払ってくださいました。そのみわざを通して、これら一切の祝福が「キリストのもの」とされた人々の上に実現しています。そして大事なことは、ここでコリント人たちが「キリストのもの」と言われていることです。ここは前の節までの書き方とはちょっと違っていています。もし同じ調子で行けばどうなるでしょう。「キリストもあなたがたのもの」となります。ところがここでは「あなたがたはキリストのもの」とひっくり返っています。つまり 22 節では、すべては彼らの益に仕えるしもべであると言われましたが、だからと言って彼らが本当に一番上の上にいるのではないということです。彼らはキリストのものです。キリストが主です。しかしその主である「キリストのもの」と彼らがされているところに彼らの真の幸いはあるのです。

そして最後に「キリストは神のものです」という言葉で結ばれています。聖書はキリストが最後だとは言いません。キリストは神が遣わされた方です。ですからキリストのものである私たちは神のものでもあることとなります。このように見る時、9 節で教会が神の畑、神の建物と言われ、神が私たちが成長させてくださる方だと言われたことの全体が見えて来ます。神が教会を育てる方法はキリストを通してです。またキリストにあってすべてのものを通してです。パウロやアポロやケファも神が教会のために遣わしている道具です。私たちはこれら全部を神からのものとして感謝して受け止め、この神の手段を通して十分に養われるべきであるということとなります。

私たちは今日の箇所からキリストのものとされていることは大変な祝福の中に生かされていることであることを改めて教えられます。22 節の「パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの」という言葉は、人間の誰もが思いつきもしないような驚くべき言葉ではないでしょうか。しかしキリストのものとされているとは、そういうことを意味します。主は十字架を通して、このように私たちが導いてくださっています。ローマ書 8 章 38～39 節:「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。」 この幸いに生かされていることを今朝改めて覚えて神に感謝をささ

げたいと思います。私が主ではなく、キリストが主であり、私たちが「キリストのもの」とされているがゆえに、私たちはこの祝福に今日も生かされています。

そして私たちは神が与えてくださっている祝福を十分活用する者でありたいと思います。自分勝手な目で、ある人のみをえり好みし、それで人間を誇り、争いを起こし、他の人を切り捨てる愚かなことをしないように。神はパウロもアポロもケファも与えてくださいました。今日も多種多様な器を送り、私たちをより豊かな方法で成長させようとしてくださっています。私たちの目に優れているとは映らない器を通して、神はご自身の教会に益をもたらそうとしてくださっています。神はそのようにして私たちを育ててくださっています。その神の御心を受け止め、神が与えてくださっているすべてを十分に活用させていただいて御前に成長させていただく者たちへ、そしてその成長をもって神にすべての栄光を帰す教会の歩みへ導かれたいと思います。